

2018年度西南学院大学演劇部冬公演

上演脚本

午後8時38分、

礼文駅。

脚本…石田克騎

編曲…大石華愛

蝉の鳴き声が聞こえる。

B 舞台明転。 8月上旬の礼文駅。

廢線が決まった路線だけあって、ホームには誰もいない。

ベンチにも誰も座っていない。

下手から高木が登場。

高木

やっべーな。完全に寝過ぎた…こりや部活間に合わねーな…もう…

時計を見る仕草の後、ベンチの方を見遣る高木。

B 舞台暗転。

その後、高木の音声で録音されたナレーションが流れる。

ナレ

偶然乗り過ごした列車。降りた終点の駅。それが、俺と彼女の最初の出会いだった…もしかしたら僕はその時から…

プロジェクターに「午後8時38分、礼文駅」の表示。フェードイン。

電車のジョイントを音が聞こえる。

その映像の周りに特急の行先案内の枠が付く。流れていくタイトル。

「次は筑紫中央」と表示がなされる。

スポットライトを浴びて、後ろから車掌(若い運転手)が登場。

「切符を拝見致しませう」と言いながら、何人かの切符を見ていく。

この時に会話をして構わないが、そこは演者の技量に依存する。

前に出てくる車掌(若い運転手)。客席の方向を向いて、喋り始める。

車掌

えー。みなさま、こんにちわ。本日はこの列車をご利用いただき、誠にありがとうございます。本日は車掌を務めさせていただきます。入社2年目、中川です。

車掌、会釈。

車掌

それでは筑紫中央駅からの乗り換えのご案内を致します。筑紫本線、上りの普通列車は(現実の時間に依存。5分程度先の時間)、2番乗り場の発車。礼文線下り列車の礼文行きは(現実の時間に依存。かなり先。劇の終了予測時間を言う)、4番乗り場の発車です。お乗り間違えの無いようご注意ください。

車掌、会釈。ゆっくりと顔をあげる。軽快な音楽がかかる。

車掌

よし！てなわけだね、僕の仕事は終了です。…じゃあどうしましょうかね。10回クイズでもしましょうか。…え？古い？（客席に耳を傾ける仕草）…ああ、そうですか…じゃあモノポリーでもしましょうか！…え？この人数でやるゲームじゃない？え？知らない人は知らない？…で、ですよねえ…まあみなさん、疑問に思っただけじゃない？俺はゆっくりと電車の旅を楽しみたいのに、どうして車掌がこの車両にずっと居座るんだ？え？第一、乗り換えの案内は車掌室でアナウンスするもんだらう？…みなさんのその意見、一旦無視させていただきます。

車掌、会釈。

車掌

それでは僕のもう1つの役割であります、この劇の説明をさせていただきます。

指パッチン。全ての舞台が点灯。

車掌

この劇は2つの舞台から構成される劇となっております。みなさまから見て左側が部室。正面が今回の物語の中心舞台となります「礼文駅」となります。この複数の舞台を使って演じられる劇をお楽しみいただければと思っております。

車掌、会釈。音響がフェードアウト。

車掌

それじゃあ時間もないので、そろそろ本題に行きましょう。皆さまは普段、どのような交通手段を使ってるでしょうか。バス？タクシー？自家用車エトセトラ…

別の音響がゆっくりとフェードイン。

車掌

中でも決められた線路という鉄の上を走り、遠く離れた決められた場所、つまり駅で人を取り降りさせる鉄道という交通機関は、よく考えてみると、異色の交通機関ではないでしょうか。その鉄道を運営する、鉄道会社に勤めはじめて早2年。私も車掌として色んな駅に行きました。古い駅、新しい駅、大きな駅、小さな駅…その駅の全てで人が乗り、人が降り…ひとつひとつの駅が、様々な物語を刻んでいます。今回の劇はそんなお話。どうぞお楽しみください！

オープニング。

一気に音響の音が上がり、B舞台が明転する。

曲の盛り上がり所をちよど持つてくるように細工。

車掌、オーケストラの指揮者のようにしながら、はける。

蠢く戦時中の服を着た人々。列車を見送ろうとしている。

そこに白いワンピースの人(○○)が入ってくる。

そのまま電車を見送る舞台上の全員。

そこに爆音が鳴り響き、赤い照明と共に二手に分かれて他のモブが消える。

白いワンピースの○○だけそれに巻き込まれ、ベンチにそのまま座る。

その後、順々に登場人物がポーズを取りながら登場。

(○○はその間に一旦はける)

音楽の終わりとともに、スポットで照らされる上手側ベンチ。

誰も座っていない。

パチンと照明が落ちる。

夏の蝉の声の音響。「2005年、夏」とプロジェクターで表示。

B舞台に広がる礼文駅。夏の日差し。

上手側のベンチには一人の白いワンピースの女性が座っている。

しばらく流れる平和な風景。

そこに電車の接近メロディーが鳴り響く。

ホームへとディーゼルカーが入線してくる音が聞こえる。

ブレイキ音。ドアの開く音。運転士席のドアの開く音も聞こえた。

下手から運転士がゆっくりとやってくる。

アナ

礼文く礼文。終点です。お忘れ物の無いようご注意ください。

運転士が上手側のベンチに座る女性に対して、軽くお辞儀をする。

女性もそれを返す。

少しして、老夫婦が笑顔で下手から登場。

おじいさんはポケットから切符を取り出して、運転士に渡す。

おばあさんは鞆からがま口の財布を取り出し、少し探し、運転士に渡す。

老婆

あと、1週間ですか？

運士

そう…なりますね。

老婆

あまり無理せず、頑張られてくださいね。

運士

ええ。ありがとうございます。

老夫婦、運転士に挨拶。ベンチに座る女性も挨拶するが、老夫婦はそのまま駅の正面出口から出ていく。
運転士、一旦下手に戻る。

〇〇
今日は…とてもいい天気。

突然場違いな音楽がかかりだす（登場 BGM）
少ししてから、中田、登場。

中田
とうっ！我々礼文高校新聞部うっ！！ついに取材場所！礼文駅に降り立つう

三井、下手から少し急ぎ足で登場。

高木も後ろからゆっくり歩いて登場。

三井
ちよつとちよつとちよつと中田！なに大きな声出してるのよ、あんた！近所迷惑でしょ。

高木
よし！中田！いい意気込みだ！その調子だ！その調子でいけ！

三井
ちよつと高木、あんたも少しは注意しなさいよ。

高木
俺のことは高木と呼ぶな。この部の部長なんだから、部長と呼ばべ！それに周りをよく見る。ここはローカル線の終点の駅だ。周りにも何もねえよ。
三井
とは言ってもね…

中田、キラキラした目つき。

中田
でもここが礼文駅なんですわ〜周りは畑まみれで田舎くさーい！

三井
ちよつと、あんた失礼でしょ！この町の人に！

高木
中田！！

中田
はい？

三井
ほら、高木あんたからも言っちゃって…

高木
中田、あれは畑ではない。田んぼだ。

三井
ソコカヨオイ！

中田
え？そうなんですか？

高木
ああ。田んぼというのは稲を耕すために作られた用地。畑はそれ以外を指す。

見ての通り、あそこで育てられているのは稲だ。よって田んぼと呼ばれる。地理用語集・山川出版社より。

中田 なるほど！

高木

お前は言い間違いが多い。礼文高校新聞部唯一の1年生がそんなでは困る。

中田

礼文高校新聞の発行を続けてもらうためにも、今後同じ間違いはするなよ？

三井

はい！

三井

ちよつとあなたたち、何そこで漫才してるのよ。第一、ここに来た目的を覚え

てるの？

中田

目的？

高木

ああ勿論覚えてるさ。

スポットライトが3人に当たる。

中田、客席に向けてメタ発言。

その間に高木と三井は、こっそり荷物を降ろす。

中田

1週間前！新聞部部室にて！あそこに部室のセットがありますが、面倒なので今は使わず、ここで演じます！

高木

よし！来週！礼文駅に取材に行くぞ！

三井

礼文駅？

中田

おお！楽しそう！

高木

そうだ。

三井

またどうしてよ。あんた鉄道なんて興味あったっけ？

高木

お前も礼文の人間なら聞いただろ？礼文線の廃止、廃線が決まったって。そしてその廃線というのが今月末！

三井

そりゃあ知ってるけど…

高木

9月号の締切が迫る中！廃線っていう、学生人生においてセンセーショナルな話題！それを次の学校新聞に載せれば、この学校の生徒は忽ち食いつく！

中田

！…いやそれどころじゃない…記事が地域のニュースで大きく紹介されて！

三井

全国…いや世界中に拡がり！…世界で最も権威のある賞！ピューリッツァー賞だつて受賞するかもしれない！！

中田

ピューリッツァー賞？

三井

世界的に有名な、新聞などに与えられる賞よ。また妄想タイムが始まっただけ。

中田

ああ。

高木

ピューリッツァー賞を取れば！俺も夢の父ちゃん越えー！！！！

中田

お父さん、すごい人なんですか？

高木

ああ、まさにこのピューリッツァー賞の最終候補まで残った男だ。

中田

ええすごい！

高木

…写メとっていいぞ（ポーズを決めて）

中田

…写メとっていいぞ（ポーズを決めて）

高木

…写メとっていいぞ（ポーズを決めて）

中田

…写メとっていいぞ（ポーズを決めて）

中田 いや撮らないですけど。
三井 で、高木。
高木 なんだ。ピューリッツァー部長と呼べ。
中田 なが。
三井 取材するたって、誰に取材するつもり？あそこは田舎の駅すぎて駅員はいないし、駅そのものに取材するってわけにはいかないでしょ。
高木 シヤラップ、ビークワイエット、キープスタイル…実はな、いるんだよ。いい人材が。
三井 人材？
高木 いやむしろ！…その人がいたから、俺はこの企画を立ち上げたんだ…
三井 ふーん。で、その人は？
高木 ここ最近暑いだろ？だから俺はこの夏の間、部活へは電車で行くことにしたんだ。でも夜遅くまで起きてることも多かったし、電車の中で思わず寝てしまった、1度、終点の礼文駅にまで行ってしまったことがあった…その時…見つけたんだよ。礼文駅のベンチに座る…一人の美しい女性…それからというもの…俺は夏休みの出校日や新聞部活動日に電車に乗る度に、礼文駅に行き、その女性を見てきた…その女性は欠かすことなく毎日、礼文駅にいた…でもしかししたら、俺のことを待ち望んでいたのかもしれない…
三井 へー。あんたが最近毎日遅れる原因が分かったわ。
中田 高木先輩！
高木 なんだ？
中田 その人って、一体どんな人なんですか？
高木 おお聞くか？スラっとした足…細い腕…透き通るような肌に白いワンピース
： おお！
中田 そんなことどうでもいいから！日取り決めるわよ。ただでさえ、1日合計5
三井 往復しかしないような田舎の路線を！廃線前に行かないといけないんだから。
中田 廃線っていつなんですか？
三井 えーっと確か8月の31日じゃなかったか…
中田 アーッ！
三井 うるっ…どうしたのよ急に。
中田 それって花火大会の翌日じゃないですかー！
三井 花火大会？
中田 毎年8月30日に行われる、礼文花火大会ですよ！毎年恒例！2000発
の花火の光が私たちを包み込む…今年こそ絶対彼氏と行くこうと思ってて！
三井 あんた彼氏いないじゃない。

中田 夏は何が起こるか分からないんですよ

三井 夏…

高木 中田！お前の言う通りだ！夏休みは恋の季節！素晴らしき出逢いがそこらじゆうに転がってんだ！！

三井 素晴らしき出逢い？恋の季節…？

運転士、再び下手から登場。

高木 だからこそ…！座ってる女性に…告はk…じゃなかった、俺は取材を申し込もうと思う！

運転士 あのくすいません。

新聞部3人、回想から外れる。

高木 は、はい？

運転士 切符の方をお願い致します。

高木 あ、すみません。すぐに出しますんで！

高木、鞆を漁りだす。三井と中田はすぐに切符を取り出し、運転士に渡す。

高木、切符が見つからなかったらしく、申し訳なさそうに運転士に。

高木 あのくすいません…礼文高校前駅からここまで切符代いくらですかね…？

運転士 230円です。

高木 あ、そうですか…

高木、ポケットをまさぐり、300円を出す。

高木 これからお願いします。

運転士 はい。

運転士、おつりを返却。

運転士 こちら、70円のお返しですね。ありがとうございました。

運転士、下手へとはける。

三井 ……あんた……切符なくしたのね……

高木、拡げてしまった荷物を片付ける。
その時、突然中田が叫ぶ。

中田 あっ！私、電車の網棚に三脚とカメラ忘れちゃいました！
三井 なにしてんのよ。

中田 急いで取ってきます！

中田、下手にはける。
高木、片づけ終える。

高木 よし！それじゃあ取材を始めていこうと思う！取材対象は…

高木、○○を見遣る。

高木 いたいた！あのくすいませんく！

三井、怪訝そうな表情。
その時、下手に突然スポットが当たり、中田が登場。

中田 じゃっじゃじゃーん！再び新入部員の中田ちゃんです！このシーンの説明をさせていただきますーす！

中田、三井と高木の間くらいに移動。

中田 笑顔の高木さんに対して、怪訝そうな表情の三井さん。この三井さんの表情は、部長である高木さんが女性に現(うつつ)を抜かそうとしているからではありません。…実は、三井さんにこの女性は見えていないんです！ね、みなさん、驚いたでしょ！？…その理由はなんと…え？大体わかる？…ああそうですか…まあ何れにしろ、後でわかることですし…じゃあとりあえず、続きをどうぞっ！

中田、下手にはける。照明が戻る。

高木 あのくすいません。

○○、高木の方を向く。そして優しげな表情で口を開く。

○○ ……なんですか？

高木 あのく僕ら、高校の新聞部なんですけど…よかったら、取材の方お願いできないでしょうか…？

三井 なにあいつ…なんであいつ……ベンチと話してるのよ…

○○ いいですよ。

高木 ありがとうございます！…まずお名前は？

三井 ベンチですよ。

○○ 和田○○と言います。

高木 和田○○さん。いいお名前ですねー！

三井 あいつ、ベンチに…名前つけてる。

高木 いつからここに？

三井 古いし、多分すごい昔からでしょ！

○○ さあ…私にもわかりません…

高木 ああ…にしても透き通るように白いですよね。

三井 はあ！？

高木 ○○さん。

三井 どう見たって真っ赤じゃない！その和田さんとかいうベンチ！ちょっと、高木！

三井、高木の肩を掴む。

高木 ちよ、なんだよ。今取材を…

三井 あんた何に取材してるのよ！

高木 何に取材って見ればわかるだろ！

三井 はあっ！？

高木 ああ、こいつ三井って言いまして、副部长なんですけど、これが口うるさくって…

中田、下手からカメラと三脚を取って戻ってくる。

三井 ベンチに私を紹介するなっ！

中田 カメラ持ってきました！…あ、高木さん、ナンパですかあ？

三井 ベンチに！！！？

高木 ちげえよ！これは取材で…ああ、彼女はうちの部唯一の1年生部員の中田で、
恥ずかしながらうちの部、この3人しかいなくてですね…
○○ そうなんですネ。
高木 あ、写真の方って…
○○ 別に大丈夫ですよ。
高木 ああそうですか！じゃあ、中田、早速頼む。
中田 はい。

中田から三脚を立てはじめる。高木は横に座る。

高木 すいませんね。ほんとに。
○○ いえいえ…
三井 ちよつと…
高木 LINEとかTwitterとか…
○○ らいん？ついたあ？

三井、高木に近づく。

三井 高木！
高木 なんだよ。今、話してるだろ？それにその位置まで来たら写真に入っちゃまう
だろうが？
三井 ちよつとあんた…
中田 はいじゃあ撮りますね〜！
三井 ちよつと…

ピースをする高木。

中田 はい、チーズ！！

焚かれるフラッシュ。スポットライトがベンチに座る○○に当てられる。
フラッシュ音の残響。

中田 よし！オッケーです！！確認します。
高木 いや〜すいませんね。撮らせていただいて。
三井 高木！！！！

少し間が空く。攻寄る三井。

高木 な、なんだよ。

三井 あんたどうしたの！私をからかっているの！？
高木 は？

写真を確認する中田。表情が曇る。

高木 からかうたつて…一体何を…

中田 あの！…すいません。ちよつといいですか？…今、写真を撮ったんですけど

高木 …高木さんの横に…何も…写らなくて…

高木 …え？

高木、カメラを確認。

高木 あれ…俺しか写ってない…もうワンショット、失礼します。

おりのるシャッター音。そしてフラッシュ。

1枚撮って確認、1枚撮って確認。そして連写。

高木 な、なんで…ど、どうしてですかね？このカメラ、調子が悪いのかも…

高木 見える人には…反応してもらえるんですけどね。

高木 え？

高木 どうしてもカメラとなると。私、写らないみたいで。

中田 カメラだと…写らない…？

高木 …もう死んじゃってるんで。

高木 …え？

蝉が落ちてくる音。足元に落ちてきた蝉に大慌ての三井。

三井 うわっ！セミッ！セミッ！

中田 それって…

高木 いやあまさか。またまた御冗談を。

三井 ○○ 本当です。

三井 あっち行け！あっち行け！

高木 だってもしかあなたが幽霊だとしたら、僕霊感なんて…

○○に近づく高木。目の前までついて、○○を見る。固まる高木。

中田 ど、どうかしました？高木さん。

高木 ハハハ…ちよつと透けてる。

失神する高木。

中田 高木さーん！！

三井 おりゃ！

三井、蟬を蹴り飛ばす。そして高木に気づく。

三井 え、ちよ、どうしたのよ。

中田 高木さん、驚きのあまり失神しちゃって…

三井 なにがあったのよ！

中田 高木さん！高木さん！

起き上がる高木。

高木 はっ！ここはどこ！？私は高木！？

中田 しっかりしてください！

○○ 大丈夫ですか？

高木 ああ。すいません。少し驚いただけで…

○○ こちらこそすいません。急に…

三井 だから誰と話してんのよ！

高木 …○○さん！

○○ はい？

高木 僕は…透けてるあなたも愛せます。

ディーゼル車のエンジン音。発車ベルが鳴る。

構内アナウンスに被るように、運転士のアナウンス。

運士 まもなく△△駅行き折り返し普通列車が発車します。ご利用の方はお急ぎ

ください。

三井
ほら！あんなたちが遊んでるから…
高木
遊んでなんて…これはあくまでも取材で断じて口説いていたわけでは…

中田、掲示板に貼ってある時刻表を見て。

中田
うわ。すごい。この電車逃したら、次3時間後しかないです！ウケる。

高木
え。3時間後！？

三井
ウケないわよ！高木、あんた、電車のダイヤまでもに調べてなかったのね！

高木
いやほら…毎日乗ってるわけじゃなかったし…

三井
あんたに任せると、いつつもこうなる！

高木
流石に3時間後の列車だと、時間持て余すな…

2度目の発車ベルが鳴り響く。再び、運転士のアナウンス。

運士
お急ぎくださいーい。

高木
て、撤収！！

中田
は、はい！！！

中田、三井の助けを借りて、急いで三脚とカメラを片付ける。

高木、無駄にせわしなく動く。帰り支度が終了。中田と三井は下手へはける。

高木は三脚を持った状態で、それについていこうとする。

中田
三井さん！切符って！！

三井
中でも買えるから！

高木
あ！○○さん！

○○
？

高木
本日はドタバタと失礼しました！また来ます！

○○
…はい。

高木
取材のご協力ありがとうございました！

高木、深々と頭を下げ、下手へと走り去る。

ドアが閉まる音。発車ベルが止む。ディーゼルカーが走り去る音。

しばしの静寂。環境音だけがこだまする。

財布を取り出し、白い写真のようなものを取り出す。

切なげなBGM。照明がゆっくりと消えていく。

フェードアウトし終わると、プロジェクターがB舞台に。

プロジェクターで映し出された「翌日」の文字。
喧しい鍵を開ける音とドアを開ける音。A舞台が明転。
猥雑な部室。ロッカーの横に不自然な掃除用具。
まず高木と中田が上手から登場。

中田 いえーい！部室一番乗りー！！

高木 うわ、やつぱり暑いなこの部屋は…

三井、上手より登場。鍵を鍵かけにかける。

三井 ちよつとあんたら、いい加減部室の鍵くらい、私を待つんじゃないで、自分で取ってきなさいよ…

中田 まあ部室って言っても、物置部屋みたいな感じですけどね。エアコンがあるだけ、まだまし〜

エアコンのリモコンを握り、エアコンをつける中田。
エアコンのリモコンの音と起動音。

三井 高木、あんたに言ってるのよ？

高木 え、鍵の件？

三井 そうよ。

高木 それはお前の仕事だろ？

三井 はあ？

高木 俺は取材をして、記事を書く。お前は校正とそれ以外。それは「It isn't my business」

三井 その記事に関してもよ！推敲担当してるんだから、少しは私に相談くらい…
高木 そーれーに！勘弁してくれよ。今、数学の伊沢に会々と厄介なんだよ。俺、補講サボって受けてないから。

中田 あー伊沢先生ですよね！わかりまーすー！高齢な上にやたらと嫌味！しかも数学の「エックス」のことを「イックス」っていう最低教師！！

高木 だろー！毎回あの先生が「イックス」っていう度にくしゃみしてんのかなー
中田 って思ってたんだよ！！
中田 ですよね〜！

三井 (大きく聞こえる様に溜息)

中田 …伊沢先生の話、盛り上がりますよね。

高木、前に出てくる。そして優しく中田に問いかける。

高木
だが、中田。俺たちが集まったのはその話をするためじゃないよな。俺たちが集まったのは、(遊び)をするために

「(遊び)」というボケをする高木。しかし三井の表情を見て、踵を返す。

高木
新聞部の活動だよな。な、週3でやってる。今日は活動日の木曜日だから集まった。そうだよな？

中田
まあ、楽しいですから、夏休み中は何度でもいいんですけどねー。週4だろうが週5だろうが！

三井
私は週7でやりたい気分だけどね。

中田
いやあ三井さん！こんな楽しい部活に誘って頂き、ありがとうございます！
こっちは人数が足りないから、中学時代の知り合いのあんたを誘っただけよ。
またまたー。ツンデレなんだから。

三井
そんなことより！…昨日のアレ。どうするつもり？

中田
アレ？

高木、部室の椅子に座る。

三井
礼文駅の記事よ。

中田
ああ。

高木
どうするって？

三井
あんたが言ったんでしょ。特集にするとかなんとか。

高木
ああ、それか。…そりゃあ予定通りに特集にするよ。

三井
はあ！？

高木
取材対象も決まったし！写っちゃいけないけど、写真だっってもらった。あとはフォーカスするポイントを見つけて、そこにフォーカスを…

中田、写真を確認し始める。

三井
あんたは！…昨日の出来事、どう考えてるの？
え？

高木
昨日の取材：取材対象が私には見えない、写真にも撮れない！？そんな幽霊に取材しました。記事にしましたって言って！裏もなにも取れてない…誰がそんな新聞信じるのよ！少なくとも、私はあそこに幽霊がいるなんて信じて

ない。

高木　　だーかーら！本当にいたって言ってるだろ！？あそこに白いワンピースを着た、女の人が…！

カメラを確認していた中田が口を開く。

中田　　でも…やっぱり写ってないです…昨日撮った写真に…高木さんとベンチ以外は…

高木　　…。

三井　　そんな新聞を衆目に晒したら…うちの部はなんて言われると思う？…嘘をでっち上げてまで、新聞を書いている集団だと思われる。…あんたや私や中田が、どれだけ周りに白い目で見られるようになると思ってるの！？

高木　　…でも、これはスクープなんだ！廃線予定の駅にいる幽霊。最初の予定のただ座っている女性に対する取材なんかよりも何倍も！

三井　　高木…あんた、変わったわね…

高木　　え？

三井　　つまらなくなった。とつても。

高木　　ど、どういうことだよ。

三井　　いつか言おうと思ってた…覚えてないの？…1年生の頃。この部の新入部員は私とあんたしかいなくて…その時はどんなに地味でも、意味のある記事を地道に…あんたは書いてた…でも、いつからか、あんたが追うのはスクープばかりだった、学校のことなんて記事にしやしない。海外で起こった事件の講評を色んな新聞からコピペしたような内容で書いたり、でっち上げた陰謀論の記事にしようとしたり…一人で突っ走って…あんたにとつて、この新聞部って何なのよ…

高木　　でも本当に…

中田　　三井さん！落ち着いてください！確かに、高木さんは校長先生のナンバープレートが「666」だったのを見て、校長はフリーメイソンの会員だという記事を書こうとしたりする人です！でも、今回ののは…確かに写真には写ってませんが、私も見たんです！信じてあげてください！

三井　　…。

中田　　あ、そうだ！じゃあ、私が今日、もう1回取材に行ってきます！

二人　　え？

中田　　ええ！？

高木　　いや、お前が言ったんだよ。

中田　　ああ、つまり、私がもう1回、またあの駅に取材に行ってきます。そしてまた

あの女の人がいれば、話を聞き出してくれますから！

高木 いや、それは俺が…

三井 あんたは信用ならない。

中田 そうでしょ？でも私には嘘をつく勇氣も、嘘記事を書く実力もない！いいアイデアだと思いませんか！？

高木 いや…やっぱり、俺が行った方が…

三井 (無視) まあ、それはそうかもしれないけど、で、その間私たちは何をしてくれる方がいいの？

中田 ウーンソーダナー。あ、じゃあ三井さんは、市役所で戸籍の記録を見てもらっ
ててください！

三井 戸籍の記録？

中田 はい！この市の！確かにこの市の元住民である確証は取れませんが、もし以前住民だったとしたら、あの人が何者なのかわかる！

三井 どうしてそんな作業を私は…

高木 お前じゃん。裏取れって言ったの。

三井 …ん、あああああ！！

中田 よし、じゃあ早速行動に移りましょう！

中田、部室に貼りつけられている時刻表を見る。

中田 ぎよぎよ！まずーい！あと10分で電車来ちゃう！じゃあ急ぎます！！

部室を出ていこうとする中田。

高木 ああ！ちよ、ちよっと待った中田！

中田 どうしたんですか。高木さん。

高木 俺は何をしてれば？

中田 ……待機！

部室を出ていく中田。

高木 ……た、待機って…

三井 あの子も1年生ながらわかってるのね。色恋してるあんたを、この取材に巻き込んだら面倒になること。(皮肉)

高木 色恋じゃねーって！あくまでも取材で…

三井 まあ、最も。私はまだこのことを記事にするつもりなんて微塵もないけど。

高木の前にあるPCを開こうとする中田。

高木 ちよ、なんだよ。

三井 何って、市役所の番号調べるのよ。

高木 お、お前信じてないんだろ？

三井 (ため息) 信じてよーが、信じてなかるうが、後輩の頼みを無下に断るわけにはいかないでしょ。それに：「裏を取らないと」(皮肉っぽく)。はい、そこどいて。

高木 ちよ、だ、ダメだよ。

三井 どうしてよ。

三井、電源を入れる。

PCから鳴り響く女性の音声。アイドルか何かと思われる。

三井、動かない。高木も動かない。

ゆっくりと暗転。

電車の音。B舞台明転。

ディーゼルカーの止まる音。

相変わらずいつものベンチに腰掛けている○○。

下手からやってくる運転士。ベンチに座る○○に気づく。

○○、軽く会釈。

中田が降りてくる。

中田 まずいな。カメラ部屋に忘れちゃった。あ、すいません、運転士さん。こちら

へんってインスタントカメラ売ってる場所無いですかね？

運転士 そうだね：コンビニもこちら辺には無いから…

中田 あーそうですか。ありがとうございます。あ、これ。

中田、運転士に切符を渡す。

運転士 ご乗車ありがとうございました。

運転士、下手にはける。

中田 もうカメラなしでやるか…あ！

〇〇、会釈。

中田 お久しぶりです！！幽霊さん！
〇〇 まだ、1日しか経ってませんよ。(笑顔)

電車の発車警告音。電車の扉を閉める音。

中田、〇〇に近づく。

ディーゼルカーが駅から出ていく音。

中田、時刻表を見る。

中田 列車、やけにすぐ出ていくときもあるんですね。今日はよろしくお願ひします。
〇〇 お願ひします…あれ？今日は他の方は？

中田 今日はいません。今日は私が誠心誠意！取材させていただきます！

〇〇 ああ。

中田 お願ひします！

〇〇 お願ひします。えーっとお名前が…

中田 中田です！中田瞳。漢字は目の瞳。周りからはヒトミンとか劇団ひとみ(不謹
慎でなければ『ヒットラー』とか呼ばれてますけど…

〇〇 は、はあ…それで…ひ、ひとみん？

中田 ああ、呼びにくかったら中田で大丈夫です。中田で。

〇〇 ああ。じゃあ、中田さん？今日はここに何か御用ですか？

中田 御用です！御用です！江戸時代の岡っ引きくらい御用ですよ。

〇〇 伝わります？それ。

中田 早速(さくそく)！取材の方、いいですか？

〇〇 ええ。大丈夫ですよ。

中田 ええ。じゃあ、幽霊さんのお名前は？

〇〇 和田〇〇です。

中田 和田〇〇さんですね…

手帳に書き込む中田。

中田 ご出身は？

〇〇 出身はこの町です。

中田 なるほど。和田〇〇さん、ジモティー…

〇〇 ジモティー？

中田 じゃあお誕生日なんかお伺いしてもいいですか？

○ 8月の30日です。

中田 8月の30！？もうすぐじゃないですかー！！

○ そうですね。

中田 8月の30ってことは、今週のきんよ…

手帳を落とす中田。

○ ど、どうかしました？

中田 花火大会…

○ え？

中田 幽霊さんの誕生日、花火大会の日じゃないですかー！

○ 花火大会？

中田 礼文花火大会ですよ！毎年恒例！2000発の花火の光が私たちを包み込む…今年こそ絶対彼氏と行こうと思ってて…あれ？これデジャヴ…

○ 大丈夫ですか？

中田 計画聞いてもらっていいですか？

○ 計画？

中田 8月30日の計画です！まず、彼氏を作ります。長身でイケメンでムキムキ！さりげない優しさと淡いコク。その彼氏がこう言うわけです…「綺麗だな」…すると私がこう答えます！「綺麗ね、花火」。すると彼氏がこう返します！「おまえがなっ」…「えっッ！？」ってサイコーサイコーサイコーサイコー！

中田、突如地面に這いつくばる。

中田 アーっ！彼氏ほじー！！！！

○ …中田さん？

中田 はっ！？すいません、取材中に。トランスしてました！

○ トランス？

中田 彼氏が欲しすぎて…あ、そうだっ

ニヤニヤしながら、○○に近づく中田。

○ な、なんです？

中田 幽霊さん…幽霊さんって恋人とかっているんですか？

○ ○ 恋人？
○ ○ そうです。恋人恋人。
○ ○ 恋人はいませんけど…婚約者なら。
○ ○ こここ！婚約者！？
○ ○ はい。
○ ○ ちよつとちよつとちよつと！

急に近づく中田。

○ ○ ど、どうしたんですか？
○ ○ 中田 も、もう1回お伺いしますが、幽霊さんには…婚約者が？
○ ○ はい。
○ ○ 中田 名前は！？
○ ○ 明松△△さんです。△に△と書いて△△。
○ ○ 中田 ど、どんな人なんですか！？
○ ○ 中田 よかったら、写真…見せましょうか？
○ ○ 中田 ぜえひ！是非！

写真を取り出そうとする○○。

中田、逆の方向を向いて一人語り。

中田 幽霊さんの婚約者ってどんな人だろう〜やっぱりジャーニーズ系かな？嵐？スマップ？光GENJI…ようこそここへ〜

写真を見せる○○。

○ ○ この人です。
○ ○ 中田 婚約者パラダイス〜

写真を見て驚く中田。

驚きの音響。

スポットが中田にだけ当てられる。

中田 これが…幽霊さんの婚約者…？…た、高木さんにそっくりー！！！！

元に戻す。

○ ○　これが私の婚約者です。もう長い間、帰ってきてないんですけどね。
中田　これが、婚約者！？本当に！？
○ ○　ええ…嘘なんてつきませんよ？
中田　あのくそのく似てません？
○ ○　え？
中田　誰かに。
○ ○　…ど、どなたですか？
中田　…あいつに。
○ ○　あいつ？
中田　ああ、あいつって言ったらだめだ。うちの高木部長に。
○ ○　ああ、昨日来られてた男の？
中田　はい！
○ ○　えーそうですかね？
中田　似てますって！
○ ○　ちよっとわかりません…髪型が全然違うので。もしかしたら、この被ってる帽子のせいでそう見えるのかもしれないね。
中田　ああ、なるほど。そんなギミックが。
○ ○　ええ、きつとそうだと…
中田　あ、で、で、その旦那さんは！いつ帰ってくるんですか！
○ ○　旦那さんだなんて…まだ、あくまでも婚約者ですから…
中田　婚約したなんてもう旦那さんじゃないですか！で？で？
○ ○　…いつ帰ってくるんですかね。
中田　え？
○ ○　わかんないんですよ。今の私には…
○ ○　…どういうことですか？
○ ○　どうしてこの駅が出来たか知ってますか？…若い兵士とこの地域でほんの少しだけとれた、燃料運ぶため…礼文駅が開業した時、この国は戦争の真ただただ中だったんです。

戦争のサイレンの音。暗転する舞台。

この間に場面が転換される。

「1944年、夏」の文字。当時の日本の映像をプロジェクターで流す。

○ ○の回想パート。明転する舞台。

今から75年前。1944年、夏。

掲示板には当時の世相を表すポスターが散見される。

若い男女のカップル。男性は高木に酷似している。
婚約者は立っており、〇〇はベンチに座っている。

△△ …月が綺麗ですね。

〇〇 まだ…何も出ていませんよ？

△△ (笑いながら) 殊更ですか？

〇〇 (笑いながら) ばれました？

△△ そりゃあ…そこまで〇〇さんは野暮でないことは知ってますよ。
〇〇 ありがとうございます。

少し間が空く。

△△ 何を考えられてるんですか？

〇〇 (笑って) 何だと思います？

△△ うーん。分かりませんね…今日の夜の食事のコトとかですか？

〇〇 …どうですかね。

笑い合う二人。

△△ …ついに明日ですか。

〇〇 早いですね…知らせが来て、また10日と経ってないのに…

△△ …安心してください。私の担当する部隊は幸い、戦いの前線に出る部隊ではありません。いわば、補助役ですから。僕にとつてはむしろ、昨日までの方が大変でした。うちの実家は存知の通り仕立て屋ですから、途中までの仕事をこの何日かで終わらせなきゃならない。いやはや大変でした。

〇〇 …。

△△ そうだ、渡さねばならぬものが。

△△ △△、鞆の中を探し始める。

〇〇 なんですか？

△△ これですこれです。

△△ △△、鞆の中から、麻に包まれたワンピースを取り出す。

〇〇 …これは？

△△

ワンピースです。時間の合間を縫って、こさえました。

○○がワンピースを取り出す。

それはまるでウエディングドレスのよう。

△△

本来は私、こういった洋装は専門外なんですが…悪くない出来にはなったと思います。でも、一番大変だったのは、この戦時下で綺麗な白の布を手に入れることで…

婚約者、○○のおかしな様子に気づく。

△△

あれ？もしかして気に入っていませんか？

○○

…いえ、とても嬉しいんです。△△さんが服を作ってくださいました。

△△

…いやはや…そんなに喜ばれるとは…

○○

明日の見送り、これを着てきます。

△△

え、いえ、それを卸すのはいつかの旅行の時などでいいのでは？

○○

いえ。私は明日、これを着ます。

△△

いえ、それは…

△△、ベンチに座る。

○○

どうしてですか？

△△

…明日の汽車で出征するのは僕だけではありません！この地域に住む、召集のかかった全ての人間がここを明日出発します。そのような服を着ては悪目立ちしてしま…

○○

構いません。私はこれを着ます。

△△

え…？

○○

これでも私は百姓の女です。人一倍、神経だけは凶太く出てます。

△△

…。

○○

私は、ただの身体の弱い百姓娘。中身も威勢ばかりで、何も無い。でも、あなたは東京にも商品を出す、何十年も続く仕立て屋の一人息子。△△さんが私みたいな身分違いの女を選んでくれただけでも嬉しいんです。…自分の尊敬すべき人が自分のために作ってくれたものはすぐに使わなくては失礼に当た…

呆気にとられる△△。その後、○○、笑顔。

○

と、父上が言っておりました。

△

…。

○

…△△さん？

△△、○○を急に抱き寄せる。時が止まる演出として、音響が止まる。

そして音響再開。

○

…△△さん。いきなりどうされたんですか？

△

必ず帰ってきます。○○さん、私は、必ず戦地から生きて帰ってきますので。

そうしたら、綺麗な海に行きましょう。そのワンピースを着て、この駅で、このベンチで汽車を待ちましょう…1度だけじゃない。2度でも5度でも何度でも…私はあなたと…いつまでも一緒にいたいんです…

徐々に暗転していくB舞台。

それに合わせるかのようにA舞台の中田が口を開く。(照明は暗転のまま)

A舞台にはいつもの新聞部メンバー。

△△と高木は同じ役者で行きたいが、そこは演出、助演の判断に委ねる。

中田

結局その日以来、まだ婚約者は帰ってこず。幽霊さんはずっと待ち続けているんだそうです。ずっとあの駅の…あのベンチで。

三井、情報書いたノートを取り出す。

三井

実際に、市役所に問い合わせてみたら、ベンチにいた和田○○さんはこの市がまた町だった頃の人で、1944年の7月21日、旦那さんが出征した3日後にあった空襲で亡くなってる。で、さっき言われて調べた明松△△さんも1944年9月に太平洋沖で戦死してる。

中田

…。

あんたらの度を越した悪ふざけかと思ったら、ほんとにいるとはね。

中田

…そこまでのことしないでしょ…さすがに(笑いながら)

三井

いや、あんたらならあり得た。

中田

ええ…

三井

じゃあ結局、彼女は60年以上もあそこにいるってこと？

中田

え？

三井

1944年からでしょ？今が2005年だから。

中田 ああ。…そうなりますね。

三井 60年間…ずっと…

中田 長い…ですよね。

三井 長いどころじゃないわよ…半世紀以上あそこにいるってことでしょ？

中田 はい…

三井 (ため息)…一体どうしてそこまで。

中田 分かりません…でも、幽霊さん言っていました。「何時間かに1本来る列車…みんな楽しみなんです。いつかあの人が乗った列車が帰ってくるんじゃないかって」。

三井 …いつか…帰ってくる…。

中田 それを信じて、幽霊さん。ずっと駅で待ち続けているらしいです…

部室を包む微妙な間。

高木 …どう…すりゃいいのかな。

三井 ……どうするって…そりゃ…

中田 私！…やっぱり、行くべきところに行くべきだと思います。

高木 …え？

中田 …このままあの駅にいても…ダメだと思っんです。だって…今はいいと思います。列車は毎日、1日5、6本来る。でも、8月31日を最後に…その列車は1本も来なくなる…幽霊さんは、ただひとり…孤独に何も無い場所で…来ない相手の帰りを待つことになる…それは、この先もずっと…

三井、カレンダーに目を移す。

三井 あと…1週間…。

中田 もう時間もないですけど、何か私たちに出来る事があるなら…幽霊さんの手助けをするべきだと思います。

三井 まあそこは、中田の言う通りね…取材させてもらった恩もあるし、新聞部の活動とはかけ離れてるけど、それくらいのことなら…

高木 ……わりい、ちよつと今日俺、帰るわ。

三井 え？

高木 あんまり体調良くなってさ。明日も部活するだろ？ちよつと、明日考えることにするわ。

荷物を片付ける高木。

三井 ちよっと、待ちなさいよ。

中田 高木さん。

高木 夏休みもあと少ししかないし、9月分、間に合うように頑張ろうぜ！

高木、荷物を片付け終えて、背負う。

高木 じゃあな。

高木、上手にはける。

中田 あ…お疲れ様です…

高木がはけて、取り残される2人。

中田 …高木さん、どうしたんですかね？

三井 さあね。まさか体調不良じゃないだろうしね。馬鹿は風邪ひかないし。

中田 でも、なんだか…落ち込んでましたね。

三井 うーん…なんだろーね。私も最近はいいつとギクシャクすること多いしね。
中田 そうですか…

間。

中田 なんだか心配ですね。

三井 …中田、あんたは優しいね。…まあ、私も少しは心配か。

鞆から記事を取り出す三井。

中田 …あんな落ち込み方初めてですか？

三井 …ここ最近急に多くなった気もする…理由なんて分かんないけどね。

中田 …2年半一緒でもですか？

三井 …2年半って言ったって、部員以上の付き合いはしてないわよ。

中田 へえ〜でも三井さん、高木さんのことよく話してたじゃないですか。

三井 いつの話？

中田 1年前です！高校受験で私が礼文高校を受けようとした時！

三井 …したっけ？

中田

…私が礼文高校には吹奏楽部が無いって理由で志望校を少し下げようとしてた時です！…あれだけ吹奏楽に打ち込んでた三井さんが礼文高校で何をしてるのかと思って電話をかけたら、まさかの新聞部。

三井

…。
なにが楽しいんですか？って聞いたたら、新聞はただ書くだけじゃなく、取材や推敲を経て、世に出る。その行程が楽しいって！それに、うちには男の敏腕記者がいるって！あれ、高木さんのことですよね！？

三井

言ったような気もするけど…それは高木のことじゃないわよ。

中田

まさか。男性部員は高木さんだけですもん。

三井

あんたを何としても部に引き入れようと、嘘ついただけ。

中田

またまたツンデレですか？

三井

…。

クーラーの駆動音。

中田

うう…急にさぶい。この部室クーラー効かせすぎじゃないですか？

三井

え？

中田

ああ完全に近くなっちゃった。ちよつと待っててください。私、トイレ行つてきます…

三井

ああ…

中田、上手にはける。

三井

…書きあがってる記事の推敲済ませちゃうか。

筆箱から赤ペンを取り出し、記事の推敲を始める三井。

そこに高木が帰ってくる。

三井

あ、高木…

高木、机の上の鍵を取る。

三井

なに、忘れ物？

高木

自転車の鍵。これが無いと、家に帰れないからさ…行き帰りにいつも電車を使うわけにもいかないしな…それじゃあな。

再び、帰ろうとする高木。

三井

高木…

立ち止まり、ゆっくりと振り返る高木。

高木

…なんだよ。

三井

…中田があんたのこと心配してた。

高木、立ち止まったまま。

高木

あ、そう、ありがとうって伝えといてくれ。

再び進もうとする高木。

三井

先輩が後輩を心配させてどうすんのよ…

高木

…。

高木、無言で上手へ出ていく。

三井

…。

少し間をあけて、中田が帰ってくる。

中田

ふーすつきりすつきり。あれ？どうしたんですか、三井さん。

三井

いや…

中田

帰ってくるるとき、廊下で高木さんらしき背中が見えたんですけど…部屋、戻ってきたんですか？

三井

戻ってきたんだけど…ね。

中田

ああそうですか…。大丈夫ですかね？

三井

…さあ。

中田

あ、それでトイレで考えたんですけど、私達で作戦を立てませんか？

三井

作戦？

中田

はい、作戦です。幽霊さんがうまく成仏するための作戦を立てるんです！そ

三井

うして、計画通りに進めれば！…きつと、うまくいきます！

三井

作戦だったって…

中田 ちゃんと私が組んできます！

三井 一人で大丈夫なの？

中田 まだすっかりとしたビジョンはないですけど…ひとつだけ、いい方法を思いついたんです。

A 舞台暗転。 B 舞台局所明転。

蝉の声とディーゼルカーの音。運転士が灰皿の前で、煙草を吸っている。

そこに自転車を止める音。

ゆっくりと入ってくる高木。

高木 あれ？

その声で人がいるのに気づく運転士。

運転士 やべっ！

急いで煙草を消す運転士。

高木と運転士が気まずそうに笑いながら、互いに会釈。

運転士 へへ。まずいところ、見られちゃったな。会社にはコレで頼むよ。

「会社には言わないでくれ」というジェスチャーをする運転士。

高木 いえいえ。わざわざ言いませんから、安心してください。

運転士 ありがとな。電車置いて、駅の外で煙草吸うなんて、ばれるとコトなんだよ…

高木 そういえば兄ちゃん、この間の礼文高の学生さんだよな？

高木 え、覚えてるんですか？

運転士 1日数人しか乗らない路線で、数日前の客を忘れるほどにはボケてねえよ。

高木 ああなるほど…

運転士 今日は1人なんだな。

高木 あ、はい。…前は最初の取材だったので、部員全員を連れてきてたんですけど…今回の取材は僕1人で。

運転士 新聞部かい？

高木 あ、はい。そうです。実はこの路線の廃線をテーマに特集を組もうと思ってまして…

運転士、身体から煙草の匂いを払う。

運転士 取材の割には、この間は随分と急いで列車に乗ってきてたな。

高木 ああ…恥ずかしながら、全く下調べしてなくて…こんなにもすぐ折り返すとは…

運転士 まああの時間の列車はな。逆にこの時間のは折り返すまでに小1時間あるからな。だからさつきまで一服してたつてわけよ。…ところで兄ちゃん。その取材対象ってのは、なんだい。おっちゃんには依頼来てねえしな。

高木 いつも駅のベンチに座ってる…

運転士 いつも…駅のベンチ？

高木 あ、すみません…何でもないです。…忘れてください。

突然笑いだす運転士。

運転士 廃線直前に見える奴に会えるとはな。

高木 見える…やつ？

運転士 なるほど。この間、ホームでギヤーギヤー騒いだのはそれが原因か。兄ちゃんにも見えるってわけだな。あの女性が。

高木 …え、もしかして運転士さんも…

運転士 ああ。この路線に勤めてこのかた、ずーっといるよ。彼女。…ま、周りの社員には一言も言っていないけどな。

高木 え？

運転士 変なこと言ったら、その路線から外されんだよ。心の病気か何かと思われてね。あ…そうなんですか。

運転士 どうして彼女に取材しようと思ったんだ？

高木 え？

運転士 (少し笑って) 礼文線の廃線がテーマの取材で、まず最初に取材する相手でもないだろ。

高木 …あ、その…この駅にいつもいるから、何か聞けるかと…

運転士 随分と大雑把な理由だな。

高木 そうですかね…

運転士 …はっはーん。さては兄ちゃん、邪な思いで近づいた口だな？

高木 …嘘…つけませんね。

運転士 長い間生きて、色んな恋愛慕見ると、自然と敏感になってくるもんだよ。…

高木 彼女にどうしてこの駅に居るかは聞いたか？

高木 あ、はい。それはうちの別の部員が。僕も聞きました。

運士 聞いてびっくりしたろ？予想以上に重い理由で。

高木 はいまあ……あ、もしかして運転手さん。

運士 ？

高木 何か他にも○○さんに関する事知られてるんですか？

運士 うーん……別に特別なことは知らねえんじゃねえか？そういう事なら取材目的

で近づいた兄ちゃんたちの方がよく聞いてるだろ。まずそんな踏み込んだこと聞くほど俺は野暮でもないしな。

高木 ……すいません。

運士 ああ。別に兄ちゃんのこと言ったわけじゃねえよ。俺はただの列車の運転士。

おたくは新聞部。立場が違う。……まあでもこの路線に入って、その女性が見えるのが俺だけって気づいた時には、色々根掘り葉掘り聞いた記憶があるな。

高木 え？

運士 気になるか？

高木 ええ。是非教えてください！

運士 当時は俺も若かったから、随分と失礼なことを聞いたよ。旦那さんのこと、待ち続けた時間のこと、これまで生い立ち……んで、ある日一つだけこんな野暮な質問をしたことがあった。……旦那さん以外は考えないんですか？」ってな。

そしたらこう答えられたよ。「1度婚約者と決めたら、決して変えるという考えは浮かばない」ってな。さすが、当時の女性は違うな……って感じたよ。ま、その話つきり、俺は彼女とは世間話しかないけどな。

高木 ……じゃあ、本当に○○さんは……

運士 待ち続けるんじゃねえか？……ずっと、帰ってくるまで。例え、もう2度電車が来ないとしてもな。

高木 ……礼文線の廃線は……もうどうしようもないんですか？

運士 え？

高木 例えば、署名運動だとか、反対運動が起きたら、この路線が残る可能性ってのは……

運士 まあ……ねえだろうな。1日何人かしか乗らない路線なんて、残しておいても会社には何の利益にならねえ。この時期まで持つてるのが奇跡だよ。

ヒグラシの鳴き声。

運士

日暮が鳴いてんな……誰も乗ってやしないけど、そろそろ列車出すか。まだ5時すぎだつてのに、さすがに8月の終わりとなると日が暮れだすのも、はえーな。

高木

……

運士 兄ちゃん、取材しねえなら、今日は帰りな。午後から一雨来るみたいだしな。
高木 ……：そうですね…はい、そうします…あ、今日は取材にご協力いただき、ありがとうございました。
運士 礼には及ばねえよ。こつちこそ、ここで引き留めたみたいになってすまなかつたな。
高木 いえいえ。じゃあ、失礼します。

高木、下手へ帰る。
運転士、その様子を見送ると、後ろを向いて、駅を眺める形になる。

運士 礼文線…か。この路線がもつと客が乗ったらな…この駅だって、ずっと夢見れる場所になるのにな…ま、どうしようもねえか…

日暮が鳴いている。運転士は遠くを眺めている。
徐々に暗転していくB舞台。

A舞台が明転。

三井だけが部室で椅子に座っている。
ドアを開ける音。上手から走って中田が入ってくる。

中田 すいません！遅れました！

三井 ああ。大丈夫大丈夫。

中田 ちよつと時間はかかりましたけど、作戦の方、とりあえず、全部まとまりました…：そういえば昨日お願いしたもの、用意できましたか？

三井 ああ。一応、全部めどは立った。安心して。

中田 よかったです。あれ…？高木さんは…

三井 (ため息)…：今日も駅に取材に行ってる。

中田 ああ…：そうですね。なんだかここ数日ずっとですね。

三井 そこまであいつ…：あ、それで…：考えてきた作戦っていうのは？

中田 ああ！はい。昨日、大まかに説明した通りです。まず、私たちが先に礼文駅に行って、幽霊さんにとある伝説を伝えます。それがこれです。

中田、三井に紙を手渡す。

三井 礼文駅…夏の終わりの七夕伝説？

中田 昨日私が適当に考えた話です。それで、幽霊さんを「もしかしたら今日、婚約者が帰ってくるかもしれない」と期待させます。それでこの…

時刻表を開く中田。付箋がしてある。

中田 礼文線、普通列車の礼文行き最終列車、午後8時28分の列車に、準備の済んだ高木さんをその礼文高校前駅から乗せます。この間、私たちは幽霊さんと一緒に待機します。そして午後8時38分、礼文駅に高木さんを乗せた列車が到着…。

三井 そして高木は昨日言った通りの行動をする…

中田 そうです。

三井 本当にうまく行くの？

中田 幽霊さんの婚約者、写真で見る限り、本当に高木さんに似てたんです！…うまいこと変装すれば、高木さん、本当に婚約者の人に見えます！そして幽霊さんも婚約者を一目見れば、区切りがついて成仏するはずです！

三井 そんなにうまく行くか…

中田 …もし、ダメだったら、本当のこと伝えて、幽霊さんに謝ります。一步間違えば、すごく失礼なことだって、私も分かっていますから。

三井 そうね…

中田 あ、高木さんは、何時ぐらいに帰ってきますか？

三井 ああ、いつも通りなら、5時ぐらいには帰ってくるはずだけど。

中田 それなら、余裕をもって準備が出来ます。準備をしっかりとすればするほど、成功率は上がるはずです！

三井 そうね…あ、でもその列車に他の乗客が乗っている可能性はないの？公共の交通機関なんだし。

中田 その点は大丈夫です。電話でその線の運転士さんに聞いたところ、他の乗客は住宅街のある東礼文でほとんど降りてしまうそうです。ですから、その列車から高木さんしか降りてきませんっ！
三井 なるほどね…

中田 ついでに、その運転士さんに切符は中で受け取るようにもお願いしました…
今日は8月30日。明日8月31日の最終営業日に礼文線には廃線記念列車の1本しか出ません。つまり、計画を実行できるのは、今日だけ！
三井 今日…だけ。

中田 そうです！…あ、そうだ。ところで頼んでた衣装ってどこにあるんですか？
三井 ああ、それなら演劇部の知り合いに頼んだから、そろそろ持ってきて…

ロッカーから川島が飛び出す。

川島 呼んだ？

二人 うわあ！！！！

三井 ちよ…川島、あんた何してんのよ。

川島 どうも。礼文高校演劇部部长をしております。川島です。

中田に挨拶する川島。

中田 ど…どうも…

川島 お望みの品、持ってきたわよ。

紙袋を三井に渡す、川島。

中田 あ！この袋、●●のこのだ。

川島 軍服もってこいなんて言うから、何かと思ったらそういうことね…はい、三井、私に感謝して。

三井 そ、それは感謝するけど…あんたいつからここにいたのよ…

川島 え、開演前。

三井 は！？

中田 あ、どうもこんにちは！新聞部の中田です。

川島 おー。中田ちゃん。話には聞いてたよ…よろしく

中田 はい。よろしくお願ひします！

三井 ちよつとあんたねえ…

川島 で、聞かしてもらったわよ。作戦。しっかりとした台本もあつて、なかなか面白そうじゃない。

川島、作戦用紙を勝手に読みだす。

三井 あ、それは！

川島 それよりなにより、そしてその幽霊と新聞部部长の恋！

中田 あ！やっぱり！高木部長、幽霊さんに恋してると思ひます！？

川島 ロッカーの中で聞いた話の限り、そうでしょう。だって、ここ毎日通いづめ照るんでしょ？取材なんてとつくに終わるはずなのに。

中田 はい、そうです！

三井 ちよつと…

川島 あら、三井。なにか否定材料でも？

三井 …。

川島

幽霊に恋をした…でもその人は成仏させなければならぬ…んー！ドラマでもなかなか無いわよね…あ、そうだ。私もその成仏作戦の仲間に入れてよ。

三井

え？

中田

ああ！是非是非！

川島

いえーいやったぜ。

中田とハイタッチする川島。

三井

ちよつとあんた！

川島

ん？どした。

三井

これは遊びじゃないのよ？礼文駅の女性の今後がかかっているの。

川島

ん？わかっているわかってるって。

三井

わかっているってねえ！

川島

考えてもみなくて。この作戦用紙でさ、さっきの七夕伝説の話するの、あんたになつてるんだよ？あんた台詞言ったり、嘘つくの苦手じゃない。

三井

うぐ…

川島

あ、そっか…三井さんもきつと、年を重ねて、そういったことが出来るようになったのか。ああ、なるほどなるほど。よし！分かりました。中田ちゃん

中田

はい。

川島

私、あくまでも控えていいや。なんかあった時の。

中田

はい。

三井

あんたね！

川島

へっへーん。弱味弱味。

中田

参加するとしたら、後は川島さんに幽霊さんが見えるかですね。

川島

あれ。全員に見えるんじゃないの？

中田

いえ。うちの部員で見えるのは、私と高木さんだけです。三井さんには見えてません。

川島

あ、そうなんだ三井。

三井

ええ。そうよ。おかげで最初は悪ふざけだと思ってた。

中田

事実なんですけどねー。

川島

どうしてあんただけ見えてないのよ。

三井

知らないわよ。

川島

教えなさいよ。

三井

だから知らないってば！

中田、突然大きな声を出す。

中田　なぜなに！三井さんに幽霊さんが見えない理由く！！

耳を塞ぐ2人。

中田、部室の机のモノの山をひつぺら返して、スケッチブックを取り出す。
そのスケッチブックには手の込んだ

「なぜ三井さんに幽霊さんが見えない？」
というタイトルが書かれている。

三井　あなた…これ。

中田　こつこつこつそり作ったんです。

川島、椅子に座る。

川島　よっ！中田ちゃん！待ってました！

三井　あんたねえ…

中田　これは、私のおばあちゃんが言ってたんですけど…あ、そうだ三井さんはこれについてどう思います？

三井　これ？

中田　見つめあい…そっと抱き寄せあう二人…静かに唇を重ねた途端、打ち上げ花火が上がる…きゃああああああく〜リア充死ね！！

三井　何よ、それ。

中田　何って、キラキララブロマンスですよ！

三井　キラキララブロマンス？

川島　ロマンスー！（チャチャ入れ）

三井　黙りなさい。

中田　三井さんは、これについてどう思います！？

三井　どう思ったって、うざいから溶けて死ねくらいにしか思わないわよ。

中田　こういう恋がしたいとは？！

三井　思うわけないでしょ！

中田・川島　あーやっぱり〜

三井　なにがよ。

川島　なにがだろう。

三井　お前は黙れ…で、そのキラキララブロマンスと私の幽霊が見えないのに、一体何の関係があるっていうの？

中田　考えても見てください！〇〇さんは戦地に赴いて、帰ってこない婚約者を今

も待ち続けている…今時珍しい純愛！

川島…！

中田 純愛をする者は、純愛をしている、もしくは待ち望んでいる者にしか見えない
…：そうおばあちゃん言っちゃいました！おばあちゃんの頬袋！

三井 知恵袋ね。なに？あんたのおばあちゃん、齧歯目か何かなの？

川島 今の面白いな。ほほぶく…

三井 メモるな！それになんか安っぽいし、そんな非科学的なこと…

中田 幽霊なんて非科学的なもの相手に何言ってるんですか？もうこれしかありえ

ません！安っぽいもない！

三井 うーん…あ、そういえば川島、あんたはどうすんのよ。

川島 へ？

三井 手伝うって言ったって見えないんじゃない？

川島 いや、私、彼氏いるし。

中田 ええ！？本当ですかー！？

川島 本当本当。

中田 どんな人ですか！？

川島 えーっと他校の人でー。同い年でー。

中田 はいはい！

川島 キラキララブラブロマンス？

中田 サアイコー！！

袋の中身を確認する三井。

三井 ちよつと、川島…

川島 ん？

三井 なによ、これ。

袋の中から、どう考えても違う衣装が出てくる。

川島 あ、ごめん。それ前の公演のやつだ。

中田 あららー。

川島 ちよつと部室から取ってくる取ってくる。

川島、上手にはける。

三井

こんなん…本当に大丈夫なの？

中田

あはは…

A 舞台、じんわり暗転。
蝉の音が聞こえる中、B 舞台が明転。

高木

いや〜今日はお日柄もよく…なんだか、秋の薫りする、のっぺきサマーデイズという言うか……なにが言いたいんでしょうね、僕。

〇〇

毎日、来てくださったってありがとうございます。

高木

ああ！いえいえ。こちらこそ。何度も何度も取材だって言って…毎日押しかけてすみません。

〇〇

いいえ。これなら、相手を待っている間も…寂しくありませんから。

高木

…それならよかったです。

〇〇

…高木さんは、どうして新聞部に入られたんですか？

高木

え？

〇〇

いえ。いつも私が質問を受けてばかりなので、逆に質問してみようかと。

高木

ああ、なるほど。

〇〇

教えて頂ける範囲で構いませんので。

高木

…僕はやっぱり親父の影響ですかね。

〇〇

お父様？

高木

はい。

〇〇

高木さんのお父様も新聞記者で？

高木

はい…最初は東京の方の新聞記者だったんですけど、途中でそこもやめて、ジャーナリストとして海外を飛び回るようになって…

〇〇

へえ〜（興味深げに）

高木

東欧の紛争があつてる地域で多く写真を撮るようになりました。傲慢になりますけど、世界的に有名な賞の候補もなつたんです！いろんな国から集まる写真の中でも優秀な写真として選ばれて！

〇〇

へえ、すごいじゃないですか！…で、その後どうなつたんですか？

高木

……。

〇〇

…高木さん？

高木

…死にました。現地政府軍の爆撃に巻き込まれて。

〇〇

…え？

高木

行方が分からないって言われたとき、僕はまだ5歳でした。正直うつすらとしか記憶がありません……この写真。

高木、写真を財布から取り出し、〇〇に見せる。

○ ○
これは？

高木 親父が最後に日本に送った写真です。瓦礫の中、椅子に座る女性…なぜかいつも母親から持たされてたんですよ。…そんな親父に憧れて、新聞部に入って…でも、やりたい事と出来る事があまりに違って…一人でつぶしばしちやつて…結局何をやってるのか、自分でも分からないですよ…なんだか、たまに自分…すいません。こんな話して。

○ ○
いや、大丈夫ですよ。

高木 落ち込みやすいんですよ、僕。変に。

○ ○
なんだか、その感じ。私が待ってる人に似てます。

高木 …え？

○ ○
私の婚約者、礼文にある代々続く仕立て屋の息子なんです。…小さな頃から同じ仕事をしていたお父さまの技術を盗んで…若い頃から、仕立てるのは、とてもうまかったそうです。

高木 …それ、僕に似てます？

○ ○
そこは何とも（少し笑って）…でもあの人にも1人でやるのには限界が来て

しまし、仕事がうまく熟せなくなった。途方に暮れていたその時…彼を救ったのは周りの他の社員さんだったそうです。

高木 …周りの…。

○ ○
その社員さんの力を借りて、彼は立派な仕立て屋になりました。…人間、どうしても1人だと限界がある。体も…心も。…でも、周りに人が1人でもいれば、その更に上を目指せるし、目標が達成できる。そんなことを私の婚約者である△△さんは…よく言っていました…△△さんの周りに目標の達成やおつとを上を、共に目指し、頑張れる社員がいたように、今日は来てませんが、高木さんにもそんな部員の方がいます。

A 舞台、明転。三井が机で何やら書き物。中田は忙しなく動いている。

B 舞台はストツプモーション。

中田 えーっとこれでとりあえずは大丈夫かな…あれ？三井さん何を…？

三井 あ、ごめん。記事の推敲だけ、先にやっちゃった。

中田 9月分ですか？

三井 あいつの記事をそのまま出すわけにはいかないしね。

中田 …でも、やっぱり面白いですよ、高木さんの記事。

三井 え？

中田 事実をただ単純に伝えるんじゃないかって、なんだか感情まで込められてて。

三井　それが、大袈裟な記事を生んでる節はあるんだけどね…

中田　三井さんは思わないんですか？

三井　え？

中田　高木さんの記事が面白いって。

三井　…（ため息）。

中田　どうなんですか？

三井　そう思ってたかったら…2年半も、記事なんて推敲しないわよ。

中田　お、初めて素直になった。

○　A 舞台の音声が消える。川島、軍服を紙袋に入れて帰ってくる。

○　この間もA舞台は演技を続け、次の台詞に繋げられるような動きをする。

○　そういう人たちがいるのって…すごく貴重なことなんじゃないですかね？

高木　…。

○　…ごめんなさい。なんだかお説教みたいになって。

高木　いえいえ…むしろありがたいです。○○さんからそう言われて…

○　…そうですか。そう言って頂けると、嬉しいです。

B 舞台の音声が消える。

中田　遅いな…高木さん。

川島　私が電話かけようか？

三井　あんた、あいつの電話番号知らないでしょ。

川島　知らなーい。

中田　私がかけます。

電話をかけたす中田。高木の携帯電話が鳴る。

高木　あ、ちよつとすいません…はい。もしもし。

A 舞台明転。中田は立って電話。その真横にまるで部員かのように川島。

中田　あ、高木さんですか？

高木　ああ、そうだけど。

中田　なにしてるんです？もうとっくに5時過ぎてますよ？

高木　え？

中田

(小声)昨日高木さんにも伝えましたよね？作戦の準備があるんですから。速めにお願います。

高木

ああ、ごめん、分かった。すぐ帰る。

川島

早めになー！

高木

誰！？

携帯を切る中田。A 舞台暗転。高木も携帯をポケットに戻す。
間が空く。

〇〇

大丈夫なんですか？

高木

ああ。ちょっと大丈夫じゃないですね。もうそろそろ、失礼します。

〇〇

はい。お気をつけて。

ベンチに置いていた取材道具などを鞆に戻す高木。
それを見守る〇〇。

高木

〇〇さん…

〇〇

どうしたんですか…？高木さん。

高木

もしもですよ？…もしも、このまま相手の人が帰ってこなかったとしたら…

どうします？

〇〇

え？

高木

あ、すいません。あくまでももしもの話で、そんなに深い意味は…

〇〇

…どうするんですかね。それは自分でも分かりません。

高木

…え？

〇〇

…何十年も待ってきて…その答えってどんどんわかんなくなってきたんですよ。私としては、相手が例え別の女性とでも、幸せに暮らしてるんならそれでいい。…でも、私はそれでもこの駅で待ち続けたい…どんな形であれ、あの人が帰ってくるまでは私の中で…はじめがつかないというか…

高木

…。

〇〇

また面倒な話、しちやいましたね。

高木

いえ…そんな。

〇〇

ただひとつだけ…たった1回でいいから会いたいっていうことは…いつも思ってます。

高木

…〇〇さん。

〇〇

はい？

高木

…取材の協力、ありがとうございます。非常に参考になりました。

○ ○
高木 ……それでは、僕は失礼します。自転車もずっと置きっぱなしですし、急いで帰ります。
○ ○
高木 ……それはいい。
○ ○
高木 ……それじゃあ…○○さん…お元気で。
○ ○
高木 ……はい。高木さんも、お元気で。

何かを振り払うように出口へ歩いていく高木。それを見守る○○。
音楽に合わせて、暗転していく舞台。

V T R が流れる。「運命の人ともう1度会える確率」。

そのV T R が終わると、B 舞台が明転。

夜8時台の礼文駅。ベンチには相変わらず○○の姿。

三井と中田と川島は駅の出入り口から覗いている。

川島 ……あそこのベンチに座ってるのが、幽霊さん？
中田 ……そうです！
川島 ……ふーん。可愛らしい感じね。
三井 ……相変わらず何も見えない…ていうか普通こういうのって、私の方がマジョリ
中田 ……ティーなんじゃないの？
川島 ……じゃあ早速すいません。川島さん、お伝えした通り、三井さんの代役をお願い
していただいてよろしいですか？

川島、ポケットからメモ紙を取り出す。

川島 ……りよーかい。この文章をあの人に向けて言ったらいいのね？

中田 ……はい。お願いします。

三井 ……頼んだわよ。

川島 ……任せといて。

川島、勇んで○○の元へ。

○ ○
川島 ……あら？あなたは…
中田 ……ほ、ほほんじつはおひひひがらもよく…
三井 ……え！？
三井 ……あいつ、なにしてんのよ。

三井、川島の元へ。

三井 ちよつと、あんた何緊張してんのよ！

川島 仕方ないでしょ！舞台か部員の前以外で台詞を読むことなんて、まずないんだから！

三井 はあ？

〇〇 あのー

川島 ああ！すいません。ぼんじゅーるまだむ。いっつあさにーでい…

中田、少し出てきて。

中田 川島さん、敵性言語です！

三井 ああもういい！それ貸しなさい！

三井、中田からメモ紙を奪い取る。

その場で喋りですが、三井は明後日の方向を向いている。

三井 えー。こんにちは。幽霊さんは、この地域に伝わる…

中田、走って三井の元へ。

中田 三井さん！明後日の方向むいちゃってます！幽霊さんはここ！

中田、三井を正しい方向に。川島を出入り口付近に連れて帰る。

三井 ああ、ありがとう。

〇〇 あの人は？（川島を指し）

中田 あ、あの人は…迷い込んだ人です。三井さん、続きを。

三井 ああ。はいはい。この地域に伝わる夏の終わりの七夕伝説を知っていますか？

〇〇 夏の終わりの？

三井 その伝説は礼文に伝わるもので、夏の終わりにまるで七夕のように、今まで会えなかった男女がこの礼文では出会えるというものです。

〇〇 …そんな伝説があるんですか？

三井 はい。（〇〇の方を見てはいない）

中田 え？

三井、一旦、中田に聞く。

三井 私、話かみ合ってる？

中田 はい。なぜか。

三井 よかった。

川島 …え、聞こえないんだよね…？

三井 あー。疲れた。中田、後はよろしく…

中田 あ、三井さん！

三井、出入り口に戻る。

中田 …アハハ。(愛想笑い)

○ ○ そんな伝説があるんですね。

中田 え？

○ ○ 私、長い間ここにいますけど、聞いたことありませんでした。

中田 あ、やっぱりそうですか？いやあのその…結構有名なんですけどね

○ ○ …でも、私に起きますかね。その奇跡。

中田 え？

○ ○ いえ、深い意味は無いんですよ。でも、私はその伝説をさつきまで知らなかつ

た。…そんな人にも奇跡は起きるのかなあって。

中田 …。

○ ○ ごめんなさい。今まで弱音は吐かないようにしてましたけど。少しでも親しく

なると、すぐに弱い所を見せるのが、私の悪い癖です。

中田 起きますよ…

○ ○ え？

中田 奇跡は起きます！だって…幽霊さん、ずっと待ち続けてたんですもん！

○ ○ …ありがとうございます。

川島 中田ちゃん。ナイス演出だね。

三井 いや多分、そんなつもりあの子は無いと思うけど…

遠くで聞こえる、電車の警笛の音。

○ ○ そろそろ、電車が来ますね。

中田 そうですね…ちよつと私失礼します。

○ ○ あ、どうかされたんですか？

中田 いえちよつとすいません。

中田、出入り口付近に戻る。○○は電車の来る方面に目を移す。

すいません。

いやーナイス演出。

え？

ねえ、中田。私、今気づいたんだけど、切符はどうするの？ 駅員さん、外で回収するけど…

ちやんと、運転士さんに話は通しました。車内で受け取ってくれって。

抜かりないな。

運転士さんも、幽霊さんのことは認識してたみたいで。

ああ。

あれ？ つてことは運転士さんも…

川島の声を打ち消すように列車が前を通る音。ブレーキ音、ジョイントの音。停車する列車。ディーゼルの音だけが鳴り響く。

高木は！？

もう来るはずです！

全ての環境音が消え、足音の音響。軍服を着た高木が下手から登場。
通常の環境音。なぜかディーゼル音は消えている(違和感のある場合は訂正)

高木…！！

△△…さん？

○○、初めて立ち上がる。

…待たせたな。

そして近づく！

おお！

○○に近づく高木。

いえ、そんなに長い時間は…

そして2人は…

川島

2人は？

スポットライトが当てられる2人。

一気に大きくなる夏の夜の音響。

高木が○○を抱きしめた瞬間、カットアウト。

明転。再び大きくなる夏の夜の音響。

高木

○○。待たせて悪かったな。

川島と中田、声にならない声をあげる。

三井

ちよつとあんたたらうるさい！（小声）

中田

す、すいません。

○○

本当にうれしいです…

しばらく間が空く。

○○

でも…あの人は私のことを○○なんて呼んだりしない…

川島

え…

○○

あなたは△△さんじゃないわ…

川島

え、うそ。

中田

ま、まずい！

○○

でも…優しくて暖かい…

中田

え…？

ありがとう、高木さん…そしてみなさん…とてもうれしいです…とても…幸せです。

神秘的な音楽が流れる。暗転する舞台。

音楽も消え、無音となる。

それを引き裂くように流れる花火の音。そして照明効果。

花火で照らされる舞台。

女子3人衆はゆっくり客席側向かって顔をあげる。花火が3人を照らす。

高木は○○を抱きしめていたその手をゆつくりと降ろす。

もう○○はいない。

三井

…いなく…なったの？

川島

うん：もう何も見えない：

中田

幽霊さん：いつもと反応が違ったんです：すぐ出ていこうとして：

三井

もしかして〇〇さん：婚約者がもういないことを知って：

ゆっくりと暗転していく舞台。花火の音だけがこだましている。

最後の花火の音だけエコーがかかる。

エンディングテーマがかかる。

エンディングではスタッフロールと共に現実で廃線となった路線名とその写真。

環境音に加え、人々の声が聞こえる。

8月31日午後14時02分。礼文駅から出る最後の列車に乗ろうと多くの人が列を成している。

ベンチにはもう彼女の姿はない。人々は口々に礼文線の思い出を語る。

電車は既にホームにいるらしく、ディーゼル音がこだましている。

そこに若い運転士が下手から登場。

車掌

みなさま！：お待ちせしました。礼文駅から出発する最後の普通列車の準備が整いました。後ろのドアから順に中へお入りください！

電車の扉が開く音。人々は笑顔で乗り込んでいく。

車掌

押さないように！ゆっくりと順にお入りくださいー！

人は順に乗り込んでいく。切符を若い運転士に見せ、口々に話しながら。

車掌

ありがとうございます。ありがとうございます。

全員を乗せ終わる。誰もいないホーム。若い運転士はひとつため息。

そこに下手からいつもの運転士がやってくる。

運士

全部乗せ終わったか？

車掌

え？あ、はい。もうどなたもおられません。

運士

：そうか。

車掌

：どうか、されたんですか？

運士

いんや。別に。

車掌 でも…寂しいですよ。地方のローカル線がどんどん無くなっていくのって。
運士 へっ。入社2年目の若造が面白えコト言ってくれんじゃねえか。25年間、
車掌 同じ路線を運転してきた男の前で。
運士 あ、いやそんなバカにしたわけじゃ…
車掌 分かってるよ。気にすんな。怒ってるわけじゃねえからよ。

2人流れる間。夏の終わりの音がこだましている。

車掌 やっぱ寂しいですか？
運士 え？

車掌 あ、いや。その…やっぱり自分の担当してた路線がなくなるのって。
運士 (軽く笑って) お前も何年かやったら分かるようになるよ。

ベンチを見遣る運転士。

車掌 え？どういうことですか？

運士 担当路線を決められて…いつも毎日のように見てたものが、もう2度見れな
車掌 くなる。やっぱ、寂しいもんだぜ。

運士 …。
車掌 まあ、でもいいじゃねえか。
え？

運士 開業して約60年…戦時中に兵士や零戦の燃料を効率よく運ぶために作られ
車掌 た駅が…こうやって笑顔で終われるんだからよ。
…そうですね。

二人の間に広がる間。環境音だけがこだましている。

運士 よし。じゃあ俺は最後の計器確認といくかね。お前は車掌業務を頼んだよ。
車掌 あ、はい！

運転士、下手へとはける。

車掌 14時7分発。筑紫中央行きか…

若い運転士、駅出入り口の方へと向かう。
すると、ちょうど入ってこようとしていた老夫婦と鉢合わせる。

車掌

おっと…あ、ご乗車の方ですか？切符は車内でも購入できますので、一度車内に…

老婆

ああ、いえいえ。私たち乗客ではないんですよ。ただ、最後にこの路線を走る列車を見届けたくてねえ。

車掌

ああ、なるほど。失礼いたしました。

運士

おーい。そろそろ出すぞー。

車掌

あ、それでは失礼いたします。

車掌、下手のギリギリ見える位置に立ち、電車マイクを持つ。

車掌

お待ちせいたしました。礼文線最終記念列車、まもなく発車いたします！！

若い運転士、下手側を見渡して（ドアの確認）、笛を吹く。

少し間を開け、ホーム（老夫婦）に頭を下げる。下手側に消える若い運転士。

響く車掌室の扉が閉まる音。

ゆっくりと動き出すディーゼル車の音。少し追いかける老夫婦。

立ち止まったその場所は丁度ベンチの前。

老婆

行ってしまいましたねえ。

老爺

ああ。

老婆

毎日使っていたわけではないんですけど…寂しいですねえ。

老爺

…少し、座るとするか。

老婆

はい。

以前〇〇のいたベンチに座る二人の老夫婦。

その姿はまるで60年前に二人が交わした約束のよう。

老夫婦が座ると突然鳴き出すつくつく法師。

誰かが走ってくる音が聞こえる。

現れる高木。

高木

あー！はあ…はあ…しまった…遅れた…

息を切らしたままの高木。

ふとベンチに目を遣る。座っている老夫婦。思わず二度見。

近づいていく高木。

高木 あの一すいません…存命中の方ですかね？
老婆 ええ。元気に生きてますよ。
高木 ああ、失礼しました。

間が空く。気まずい間ではない。

高木 あの一すいません。最終の記念列車つてもう…
老婆 ああ…先程行ってしまいました。
高木 あーやつぱりそうですか…

再び、少し間が空く。

老爺 お兄ちゃんは…高校生かね。
高木 あ、はい！
老爺 ああそうね…学生さん、これからの礼文を、頼んだぞ。
高木 …はい。
老爺 (少し笑って) そんなに重くとらえんでくれ。年寄りの独り言じゃ。ただこの線路を見て、思っただけやけえ。…長いおう、この線路は長いですね…
老婆 …。
高木 …よし、じゃあばあさん。そろそろ行くとするか。
老婆 はい。
高木 …。

歩いて去っていく老夫婦。

老爺 がんばりんしゃいよ。学生さん。

老夫婦、駅の入出口から出ていく。
しばらく間が空く。

一人取り残された高木。ベンチの方を呆然と眺めている。
そこに三井が走ってやってくる。

三井 あー高木、やつぱり中田ダメ。この田舎道で完全に酔ったみたいで…あなたの
お母さんにせっかくつれてきてもらってなんだけど…どうしたの高木、押し

黙って。

高木 え？あ、いやわりいわりい。

三井 最終列車の写真は？

高木 ごめん、撮れなかった。

三井 そっか…まあ道にも迷っちゃったし、今回は仕方ないんじゃない？

高木 …ああ。

三井 なによ、その気の無い返事。

高木の見ている方向を三井も見る。

三井 高木。

高木 ん？どした。

三井 なんか、ごめんね。今回、私たちの勝手な判断で動いちゃって。

高木 昨日のことか。

三井 …うん。

高木 …なーに言ってんだよ。その勝手な判断に納得してなかったら、変てこな軍服、着やしねーよ。

間が空く。

高木 それにただの取材対象だよ。…しかも写真に写らない条件付きのな。

三井 …でも、あんたと中田の目にはちゃんと写ってたのよね。その綺麗な人。一回見てみたかったなあ…

高木 嫉妬すると思うぜ？結構可愛かったから。

三井 嫉妬？そんなに？やっぱあんた、あの人のこと…

少しなごむ場。三井、上手寄りのホーム端まで歩き、上手側を見る。

三井 景色が綺麗な駅よね。無くなるの勿体ない。

高木、三井と同じ方角を見つめる。

高木 …そうだな。

新聞部の二人。つくつく法師が鳴いている。

高木 ……さ、色恋はさっさと捨てて、部室に戻りますか！

三井 色恋って…自分で認めてるじゃない。

高木 さ、撤回撤回。戻って記事を書くぞ。

三井 何の記事？

高木 9月の終わりに控えた文化祭の特集記事を書かないと。クラス発表の方も大分仕上がってるみたいだしな。

三井 ああ、なるほどね。早めにまとめないで…で、今回のコトは？

高木 ……さーな。とりあえず保留にしておくよ。まだ記事も書けそうにないし、第一、今日、最後の列車の写真も撮れなかったしな。

三井 なるほど。

高木 三井。

三井 なに？

高木 こっちこそごめんな。こんなくだらないことに付き合わせて。

三井 何も謝ることじゃないわよ。それにくだらないって何？私が記事にならないことは全部くだらないと思ってるだけでも？

高木 ありがとう。

三井 いいえ。…どういたしまして。

二人笑顔。美しい間が流れる。

高木 ……何れにしろ、俺はしっかりと記事を書いて、お前に推敲してもらって、中田に受け継いで、うちの部再建して！…立派な記者になれるように頑張るよ。

三井 立派な記者は兎も角、部の再建は本腰をいれないと！

高木 よーし！書くぞ！そしていつかは憧れの父ちゃん越えだ！彼女だって作ってやる！

携帯の音が鳴る。三井は自分の携帯を見る。

三井 あんたのじゃない？

高木 ああ。

高木、携帯を探す。

高木 中田からだ。

応答すると、いきなり中田の声。

中田 高木さーん！三井さん！いつまで駅にいますか！私止まった車の中でも…オエツ。

母親 ちよつと、息子！あんた急いであげないと！中田ちゃん、気分悪いのよ！

高木 ああ、母ちゃんごめん、すぐに行く。

三井 私、先に行くわよ。

高木 ああ。

三井、出入り口から出ていく。

母親 とりあえず早く戻ってくるのよ。
高木 うん。

電話を切る。

高木も急いで出入り口から外に向かおうとするが後ろ髪を引かれるようにホームに戻る。

写真を一枚撮る高木。バインダーを覗くその姿はどこか悲しい。

写真を確認。

高木 もう…一人じゃない…

その言葉には〇〇が成仏したということ、
ベンチには何もいないということ、

高木が孤独を解消したという3つの意味が存在する。

ベンチに向かって一礼する高木。

そのまま出入り口へと向かう。

徐々に暗転していく舞台。つくつく法師の声だけがこだましている。

その声がかットアウト。そこに入る男のナレーション。

ナレ その後礼文駅は地域の再開発対象となり、当時の面影を残すものはもう何もない。

もう1度明転する舞台。つくつく法師の声。照明と共にフェードアウト。
プロジェクターで「終」の文字がフェードインで映し出される。

(終演)

列車番号	1R	2R	3R	4R	5R	6R	7R	8R	9R	10R	11R	12R
列車種別	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	回送
行き先案内表示	礼文	筑紫中央	礼文	筑紫中央	礼文	筑紫中央	礼文	筑紫中央	礼文	筑紫中央	礼文	回送
編成数	1両	1両	1両	1両	1両	1両	1両	1両	1両	1両	1両	1両
客取扱	有	有	有	有	有	有	無	有	有	有	有	無
筑紫中央	06:55	08:14	10:18	11:46	13:27	14:44	15:15	17:43	18:05	19:31	20:02	21:14
馬宿	06:59	08:10	10:23	11:42	13:31	14:40	15:19	17:39	18:09	19:27	20:06	レ
後呂	07:08	08:01	10:32	11:33	13:40	14:31	15:28	17:30	18:18	19:18	20:15	レ
長野ヶ原	07:15	07:54	10:39	11:26	13:47	14:24	15:35	17:23	18:25	19:10	20:22	レ
礼文高校前	07:21	07:47	10:45	11:19	13:54	14:17	15:42	17:16	18:32	19:03	20:28	レ
東礼文	07:26	07:42	10:50	11:14	13:59	14:12	15:47	17:11	18:37	18:58	20:33	レ
礼文	07:31	07:37	10:55	11:09	14:04	14:07	15:52	17:06	18:42	18:53	20:38	20:49
			※1	※2	※3		※4				※5	
※1…最初の場面に新聞部全員が乗車した列車。												
※2…最初の場面の最後に新聞部全員が乗車した列車。												
※3…中田が乗車した列車。												
※4…高木と運転士のシーンの列車。												
※5…最後に登場した列車。礼文方面終電。												

【礼文線鉄道ダイヤ】

【想定列車】

資料

※脚本の内容と実際の公演内容は異なる場合があります。
 実在の人物・団体とは一切関係ありません。
 JR北海道・室蘭本線に所在する「礼文駅」とも無関係です。

